

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：23901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650564

研究課題名(和文)わが国の近代精神医療史資料の保存と利用に関する基盤整備

研究課題名(英文)A study on the preservation and use of historical documents about psychiatry

研究代表者

橋本 明 (Hashimoto, Akira)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：40208442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：わが国の近代精神医療史資料の保存と利用は危機的な状況にある。本研究は、精神医学史学会でのシンポジウムおよび資料展示、さらに研究期間中に数度開催したワークショップでの研究発表と討議をとおして、精神医療史資料の保存と利用に関する研究基盤を整備することに貢献した。また、本研究の一環として西欧の精神医学ミュージアムの現地調査を行い、その歴史と現状を比較検討しながら、今後のわが国における精神医療史資料の利用や展示のありかたを検討した。

研究成果の概要(英文)：We contributed to the improvement of the study infrastructure for the preservation and use of historical documents about psychiatry by organizing a symposium and an exhibition at the annual conference of the Japanese Society for the History of Psychiatry and several workshops aimed at further intensive discussion on this field. In addition we discussed the possibility of establishing a psychiatry museum/archive in Japan, referring to the history and the present state of psychiatry museums in West European countries.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：医学史 精神医学史 精神医療史 博物館 ミュージアム

1. 研究開始当初の背景

わが国の医学史に関する資料の保存・利用・管理は危機的な状況であると言われて久しい。精神医療史に関わる資料はさらに深刻な状況にある。たとえば、研究代表者の知る、わが国を代表する首都圏の公立精神科病院ですら患者記録の保存状態は劣悪で、かつ明治・大正・昭和期の治療・看護を知る資料が単に死蔵され、朽ち果てるに任されている。このような状況は地方の医療機関ではより深刻と考えられる。加えて、戦前には大きな役割を果たしていた医療機関ではない各地の施設（社会事業・宗教施設など）あるいは私宅監置に関わる記録の散逸・消滅の危険性はさらに高い。研究代表者はこれまで私宅監置に関する全国的調査を行い、さらに平成22年から23年にかけて刊行された精神医療史資料の復刻版（『精神障害者問題資料集成』第1～9巻）の編集作業に携わってきたなかで、精神医療史研究の基盤となる資料の整備を早急に、かつ具体的に始める必要性を痛感した。

2. 研究の目的

わが国の近代精神医療史に関わる資料は散逸・廃棄の危険にさらされており、その保存、利用、管理、未来への継承は緊急の課題となっている。本研究は、全国各地に散在している明治・大正・昭和期（昭和25年まで）の1次的・2次的資料の所在と内容、保存状態と利用可能性を調査し、また、可能な限り散逸・廃棄のおそれがある資料を収集あるいはデジタル化することで、精神医学・精神医療にかかわる歴史的研究の基盤づくりをおこなう。さらに、国内外の研究者も交えた精神医療史資料の保存と利用に関する研究会を開催する。これらのいずれの作業も、わが国の精神医療政策に関わる重要な情報ソースとなることを目的とした「精神医療史資料館・博物館（仮称）」設置に向けた重要なステップと位置付けるものである。

3. 研究の方法

平成23年度から25年度まで行われた本研究は、資料調査と研究会の開催の二つから構成されている。資料調査の内容は、全国の近代精神医療史に関わる資料の所在・内容・保存状態を把握することである。資料調査の方法には遠隔的調査と現地調査とがあり、前者による予備的調査を経て後者を実施することになる。現地調査の過程で、可能なものは資料として収集する。また、国内外の研究者等を招いて研究会を開催し、精神医療史資料の保存と利用に関する討議や意見交換を行う。

4. 研究成果

実施年度ごとに、研究の内容とその成果を述べたい。

(1)平成23年度は、学会および研究会などの

機会を活用して、近代精神医療史資料の保存と利用への関心を広く共有してもらうための活動に重点を置いた。

まず、研究代表者が大会会長として、10月29日・30日に愛知県立大学で開催した第15回精神医学史学会で、シンポジウム「近代精神医療史資料の保存と利用」を企画した。国内外から4人のシンポジストを招いて、資料保存と利用に関する講演と討議を行った。また、学会会場で精神医療史研究者・小林靖彦（1919-2007）の写真資料を中心に「小林靖彦回顧展」を開催した。

他方、名古屋駅周辺の会場で「近現代精神医療史ワークショップ」を2回（12月11日および3月25日）開催し、精神医療史に関する発表と討議を行った。1回目のワークショップでは5人（演題：「近代日本精神病患者監護政策論争に関する研究」、「近代日本精神医療史資料の保存と利用」、「傷痍軍人精神障害者医療がもたらした今日的意義」、「明治末期の精神科病院における看護師職業から見る「ケアの歴史」」、「精神病患者監護法の運用実態と病院監置の拡がり」）、2回目も5人（演題：「優生保護法の運用実態 A 県優生保護審査会議事録の分析を通して」、「中村古峽『殻』における精神病患者と家族「回想」との比較から」、「公衆浴場における「精神病患者」の法的排除」、「明治初期の精神障害者処遇 江戸時代の処遇が及ぼした影響について」、「近代精神医療史資料の利用と保存 オランダとベルギーの精神医学博物館現地調査」）が登壇し、各人について1時間の発表・討議を行った。

さらに、研究代表者は東京（11月25日・26日、昭和大学附属烏山病院など）および愛媛（1月20日・21日、愛媛県立図書館など）を訪れ、各施設・地域での精神医療史資料の収集および関係者への聞き取りを行った。

また、研究代表者は3月7日～16日にオランダおよびベルギーを訪問し、精神医学に関わる博物館を視察した。具体的には、精神医学博物館ヘット・ドルハウス（ハーレム）およびギスラン博物館（ゲント）を訪れ、加えてゲールの公立精神医学ケア・センター（OPZ）で進めている精神医学博物館設置プロジェクトに関する聞き取り調査を行った。

なお、戦前に創設された精神科病院のすべてについてウェブ上で検索を行い、当該病院の歴史や沿革に関するホームページの作成状況を調査した。

(2)2012年度には、西欧の精神医学博物館・資料館および関連施設の視察に重点を置き、その歴史・展示・企画・運営の実際について情報収集を行った。具体的に見学した施設を挙げれば、6月にはドイツのヴェルテンベルク精神医学博物館（ツヴィーフアルテン）、9月にはイギリスのベッドラム博物館（ケント）、フロイト博物館（ロンドン）、ドイツのムゼーレ（ゲッピンゲン）、3月にはスイスの

チューリッヒ大学医学博物館、ベルン精神医学博物館、アールブリュット・コレクション（ローザンヌ）である。なお、2012年4月にベルギーのギスラン博物館で開催されたアウトサイダー・アートの国際シンポジウム（Internationaal symposium over outsider-kunst: Outsiders op de kaart gezet）に参加し、同時期にゲールで行われていたアウトサイダー・アートの企画展（Identities T00）も見学した。

また、2013年1月にはこの研究の一環として第3回目の「近現代精神医療史ワークショップ」を名古屋で開催した。歴史研究者だけではなく、保健医療福祉分野などで活躍するさまざまな参加者が集まり、精神医療の歴史や資料に関する4題の発表（演題：「地域精神医療に求められているもの 洛北岩倉の事例をもとに」、「東京府巣鴨病院の記録に残る聾患者」、「病院建替えを機に精神科病院の歴史を振り返る 精神保健福祉士の視点から」、「岩龍寺ならびに香良脳病院における水治療の変遷」）および討議が行われた。

その他、研究代表者は、全国歴史資料保存利用学会連絡協議会全国（広島）大会及び研修会（11月）および日本アーカイブズ学会研究集会（神奈川県立公文書館、11月）への参加、岡山県精神医療史調査（12月）などを行った。

(3)平成25年度には、二つの国際会議で近代日本の精神医療史に関わる研究報告を行い、海外研究者との意見交換を行った。まず、6月にイギリス・オックスフォードで開催された国際シンポジウム「セラピーとエンパワーメント 強制と懲罰：労働と作業療法への歴史的・現代的視座」(Freedom and control: The changing context of work and activity in mental hospitals in modern Japan, International Research Symposium: Therapy and Empowerment - Coercion and Punishment: Historical and Contemporary Perspective on Labour and Occupational Therapy)には、研究代表者の橋本および研究分担者の中村が参加し（それぞれの演題は以下の「5. 主な発表論文等」を参照）、また7月にオランダ・アムステルダムで開催された第33回「法と精神保健に関する国際会議」(XXXIIIrd International Congress on Law and Mental Health)には、橋本および研究分担者の板原が参加し（それぞれの演題は以下の「5. 主な発表論文等」を参照）、研究発表および会議参加者との討議を行った。

また、10月には名古屋で4回目の「近現代精神医療史ワークショップ」を開催し、3人による講演（演題：「想起のアーキテクチャとしてのミュージアム 「時間のループ化」問題を考える」、「歴史資料館整備の現在の意味」、「1954年・63年『精神衛生実態調査』の資料的意義と研究可能性について」）を行い、あわせて精神医療にかかわるミュージア

ムの意義や可能性について討議を行った。

なお、研究代表者は、岡山県精神医療史調査（木野山神社、2月）、広島県精神医療史調査（妙宣寺、3月）を行った。

(4)全体のまとめ

研究期間全体をとおして本研究が目指していたのは、「近代日本の精神医療史資料の保存と利用」、さらにその先に「精神医療ミュージアム」設置の可能性を検討することであった。

「近代精神医療史資料の保存と利用」については、まずはこの問題の重要性を関係者・関係機関の間で広く共有できたことは一つの成果と考える。すなわち、平成23年の研究代表者による精神医学史学会でのシンポジウムおよび「小林靖彦回顧展」の企画は当該研究の目的達成のためには好機となった。また、研究期間中に4回開催した「近現代精神医療史ワークショップ」は、数多くの研究者の発表によって精神医療の歴史研究を活性化すると同時に、精神医療史資料の保存と利用について参加者間で意見を交換する場として機能した。だが、精神医療史資料の保存状況を把握するための国内の現地調査は、数か所にとどまった。これらは本格的な資料調査のパイロット・スタディという位置づけになるだろう。

他方、精神医療史資料を利用する一つの形態としての、「精神医療ミュージアム」設置の可能性に関して、研究をすすめていく過程において、西欧の精神医療に関わるミュージアムをいくつか視察し、その歴史的・思想的な背景や設置・運営のノウハウを比較検討し、関係者にインタビューを行う機会に恵まれた。これは、今後の精神医療のミュージアム構想には大きな刺激となったが、3年間にわたる本研究ではこの種の施設整備の具体的な工程表を示すことはできなかった。

もちろん、歴史的な資料を保存・利用する「精神医療ミュージアム」の設置を引き続き検討することは重要と考えられるが、旧来型の「ミュージアムのありかた」が批判的に検討されていることも明らかになった。したがって、精神医療史資料の利用が、精神医療の歴史を広く社会に伝えるという意味であるとすれば、社会教育的な活動（移動ミュージアム、学校における出張授業なども含む）を検討・実践することこそ優先的かつ現実的な課題であるとの認識を持つに至り、それが本研究につづく科学研究費研究（研究テーマ「歴史理解にもとづく精神保健福祉教育プログラムの開発」、平成26～28年）へとつながることになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計16件)

橋本明, 西欧における精神医学ミュージアムとその役割, 精神医学史研究, 査読

無, 17(2), 2013, 96-104

Akira Hashimoto, A 'German world' shared among doctors: a history of the relationship between Japanese and German psychiatry before World War II, *History of Psychiatry*, 査読有, 24(2), 2013, 180-195, DOI: 10.1177/0957154X12455579

中村治, 養生所から保養所へ 健康観の変化と保養所の戦略, *精神医学史研究*, 査読有, 17(2), 2013, 74-80

中村治, 洛北岩倉と精神科看護, *日本精神保健看護学会誌*, 査読無, 22, 2013, 1-9

板原和子, 明治初期の精神障害者処遇 江戸時代後期の精神障害者の処遇はどのように推移したのか, *大阪体育大学健康福祉学部研究紀要*, 査読無, 10, 2013, 1-18

板原和子, 明治6年の「癲癩」人による工部省英国人雇人に対する傷害事件に関する文書, *大阪体育大学健康福祉学部研究紀要*, 査読無, 10, 2013, 85-93

〔学会発表〕(計29件)

中村治, 患者の居場所としての岩倉, *日本精神病理・精神療法学会第36回大会*, 2013年10月11日, 京都

板原和子, 江戸時代の都市における精神障害者処遇, *第17回日本精神医学史学会*, 2013年11月10日, 東京

Akira Hashimoto, Between Legality and Illegality: Folk Therapy for the Mentally Ill in Modern Japan, XXXIIIrd International Congress on Law and Mental Health, 2013年7月15日, アムステルダム

Kazuko Itahara, Establishment of the treatment of mentally ill people in modern Japan, XXXIIIrd International Congress on Law and Mental Health, 2013年7月15日, アムステルダム(オランダ)

Akira Hashimoto, Freedom and control: The changing context of work and activity in mental hospitals in modern Japan, International Research Symposium: Therapy and Empowerment - Coercion and Punishment: Historical and Contemporary Perspective on Labour and Occupational Therapy, 2013年6月26日, オックスフォード(イギリス)

Osamu Nakamura, Family care of mentally ill patients in Iwakura, Kyoto, Japan: What made it possible and what made it over, International Research Symposium: Therapy and Empowerment - Coercion and Punishment: Historical and Contemporary Perspective on Labour and Occupational Therapy, 2013年6月26日, オックスフォード(イギリス)

〔図書〕(計3件)

中村治, 世界思想社, 洛北岩倉と精神医療, 2013, 151(+6)

橋本明, 六花出版, 精神病者と私宅監置 近代日本精神医療史の基礎的研究, 2011,

240

〔その他〕

ホームページ等

<http://kenkyukaiblog.jugem.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 明 (HASHIMOTO, Akira)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号: 40208442

(2) 研究分担者

中村 治 (NAKAMURA, Osamu)

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号: 10189029

(3) 研究分担者

板原和子 (ITAHARA, Kazuko)

大阪体育大学・健康福祉学部・教授

研究者番号: 50390175